

## 夏の思い出

嵯峨根 克 人

今年、時代小説作家、藤沢周平氏の没後10年でどこの書店にも例年以上に同氏の書籍がならんでいる。初期には暗く重い作風の地味な作家であったが、1976年刊行の『竹光始末』あたりから作風が変り、綿密な描写と美しい抒情性の上にユーモアの彩りが濃厚となり、物語の構成の上に明るく余裕のある態度がそなわるようになって、その作品は徐々に多くの人々に支持されるようになった、と評されている。映画やテレビで映像にもなってきた。数年前には代表作「蝉しぐれ」が映画化され、また、今年早々には木村拓也主演、山田洋二監督の映画「武士の一分」が話題になった。

同氏は、師範学校卒業後、中学校の教師をしていたが肺結核で入院、そして職を失い、5年間の闘病生活を強いられ、その間に大きな手術を受け、体力的に決して無理のできない体になった。療養後に結婚、しかし、最愛の妻を長女の出産後、病で失った。彼の人生はこれでもか、これでもかというほど苦闘の連続であった。本格的な作家デビューは40才を過ぎていた。

同氏の作品に引き寄せられて昨夏には同氏の故郷、山形県鶴岡市を旅した。鶴岡駅にある観光案内所で自転車を借りて、観光案内所が作った「藤沢周平作品マップ」をたよりに作品のモデルとなった鶴岡市内の建物、場所等を数時間かけてまわった。9月上旬で、まだまだ夏の日差しの強い時期であったが、暑さなど気にならず実に楽しい時間が流れた。そしてその夜は、同氏が東京から帰省する度に定宿にした湯田川温泉のとある宿に泊ってみた。宿にはいるとロビーに同氏の直筆による色紙が掛けてあり、その言葉にふと目が止まった。「耐えるほどに人生が見えてくる」。味わい深い言葉である、そう思いつつ、案内された部屋に入ったとき、一瞬、聖書の言葉を思い出した。「わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということ。」（聖書 ローマの信徒への手紙第5章3節）

翌日、鶴岡市を後にして、渡良瀬川の流れる群馬県みどり市（旧、東村）にある「富弘美術館」へ行った。この美術館は、中学校の課外活動指導中の事故で四肢の自由を失った星野富弘氏が絵筆を口にくわえて描いた詩画を展示している。鄙びた里にある小さな美術館であるが、四季を通じて大勢の人々が訪れている。淡い地味な色彩の絵には飾らない詩がついている。照明を落としたほの暗い展示室の一室に入り、柔らかいスポットライトで浮き上がった一枚の詩画を見たとき、藤沢周平氏の色紙のことは、聖書の言葉、そして星野富弘氏の詩が一つの線につながったような気がした。「待つこと、耐えること、花のつぼみ・・・みんな似ている。みんなあかるい方を向いている。」

（法人部秘書課長）